

「黙示録」の旅路と印象

——〈巡礼文明論〉の手帖(5)——

【内容】

- 一 「黙示録」の謎と希望のメッセージ―「オリエント」のキリスト教
- 二 「黙示録美術」の誕生と変容―「サンティアゴ巡礼」とロマネスク美術
- 三 「黙示録」の幻想と靈感―モアサックのサン・ピエール聖堂（フランス）
- 四 「ベアトウス写本」と終末のビジョン―エル・エスコリアル修道院（スペイン）
- 五 「天地創造図」のタピスリーと宇宙観―ヘローナ大聖堂（スペイン）
- 六 イスラーム世界のキリスト教会堂―ダマスカスのウマイヤ・モスク（シリア）

吉澤五郎

一 「黙示録」の謎と希望のメッセーじ——「オリエント」のキリスト教

「黙示録」とは、申すまでもなく『新約聖書』の最後を飾る「ヨハネの黙示録」のことである。世に、世界の終末とキリストの再臨を告げる「預言の書」として名高い。一先ず、古代教会の伝承に照らせば、キリストの使徒ヨハネが、流刑先であるエーゲ海の小島「パトモス島」で見た「天啓の記録」(黙示)とされる。ちなみに、この「黙示」(Apokalypsis)とは、本来ギリシア語の「神の奥義」ないし「真理の啓示」を意味している。暗に、「世の終り」として、世界と人間の究極的な運命を問うものである。その聖ヨハネが、天上の靈感を仰ぎ見る「聖なる光景」は、すでにルネサンス絵画史上のメモリング(「パトモス島の聖ヨハネの風景」)やプッサン(「聖パトモスの聖ヨハネ」)等の名画で知られる。いかにも、精神的な高揚感にとみ、かつ甘美なる叙情の調べである。

ところで、この「著書」は、従来の正統的なキリスト教との違和感から「異質の書」としての印象も深い。その事情については、本書が告げる「終末論的な歴史観」の特異性もあろう。また「著者」自体についても、キリスト十二使徒の若き一人として、また自ら「預言者ヨハネ」を名のるもの、とりわけ東方教会の疑義や反証等も加わり、古来「神学的な論争」の的となった。事実、古代教会史において、この黙示録が晴れて『新約聖書』(正典文書)の座をしめたのは、遅れて「カルタゴ公会議」(北アフリカ・チュニス、三九七年)のことであつた。

今日では、壮大なる「黙示録」の研究動向として、広く著者の意図を検証する「伝承史」や「終末史」の研究も手堅く進展している。さらに、その現代性を観察する「時代史」の研究として、本書が秘める終末的歴史観の普

遍的な意味と価値が問われることになろう。とくに、二〇世紀の人類史を貶めた「第一次世界大戦」の惨禍は、その歴史的な再考をうながす機縁ともなった。これまで「黙示録」世界への旅たちは、まだ深遠なる道程の途上にあり、その秘める謎は深いともいえよう。

まず、黙示録の原風景を訪ねて、その歴史的な景観と希望のメッセージについて一瞥したい。本書執筆の「真なる意図」を汲みとるには、当時の歴史的な動向と背景に眼をとめる必要がある。その成立は、おそらくローマ皇帝ドミティアヌス帝の治世(紀元八一―九六年)である。少なくとも、ローマ軍による「エルサレム神殿」の破壊(七〇年)の後であろう。とくに、同皇帝治下の小アジアで強制された「皇帝礼拝」の祭儀は、初期キリスト教徒や教会にとつて大きな「躓きの石」となった。現に、目前にせまる大迫害を前にして、信徒たちの間にも殉教者や背教者が続出した。また、偽善の罪に堕ちた教会自体の衰微と消滅を予示するものであった。本書は、まさに予想される終末の「一大予言」として、その精神的な弛緩と命運にさいなむ小アジアの「七つの教会」に宛てられた書簡である。その「ヨハネの黙示録」が記述する小アジアの「七つの教会」とは、当時の有力な教会群である「エフェソス」をはじめ、スミルナ、ペルガモン、ティヤテイラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオディケイアの諸教会である。

ところで、このヨハネの「書簡」は、全能なる「神の計画」による歴史の完成を「世界の終末」から解いている。現在のたえざる迫害と苦難は、この新たな希望の証しによって規定される、ともいえよう。いわゆる、「悪しきバビロン」にも堕ちたローマの支配に抗し、神の正義と永遠の救いを説く「聖なる勧告」である。きっと、善良な信徒にとつては、神の無限なる愛と恩恵に感謝し、新たに忍耐と改悛の情を深める「慰めの使信」ともな

ろう。黙示録の執筆は、当時の「国家宗教とキリスト教会」との間にみる緊張と対立を背景としている。まさに、巨大なる「聖と俗」が対峙する歴史的な極限状況の中で、とくにキリスト教的な歴史観として、超越的な神の計画と個人の責任を説いたものである。このように、「新約聖書」の中でも特異な黙示録の告知は、じつは純粋な「ヨハネ幻想」の所産というより、むしろ歴史的なキリスト教の異端化と迫害さらに教会分裂等の危機を背景としている、といえよう。

その長大な物語は、いわゆる地上の悪魔的な諸力と虚像をあばく世界の終末と、神の正義が支配するキリスト教の最終的な勝利を宣言する。具体的には、神の義を求めるイスラエルと、これに敵対する大国（バビロニア、ペルシア、ギリシア等）が争う構図となる。いわば、一種の救済論として、人間界によどむ二元論的な対立と価値の逆転を説くことになる。もとより、そのような思考の源泉は、古代ペルシアの「ゾロアスター教」に由来する「善悪二元論」にあるともいえよう。ところで、「黙示録」のおもなモチーフは、「世界の終末」、「最後の審判」、「新しき天地の到来」となる。いかにも超現実的で劇的なイメージを誘う主題群である。一面、永遠の生命と超自然的な幻視を紡ぐ文学的な象徴詩でもある。ときに、この黙示録を「黙示文学」と総称するゆえんである。他面、まだ稚拙な「キリスト教美術」を育む苗床として、新奇にして豊富な主題を提供している。その後、西洋図像学の発展に大きく寄与したともいえよう。

つぎに、一言「ヨハネの黙示録」を彩る思想的な特徴にふれよう。申すまでもなく、本書は先行するユダヤ教の黙示文書を範としている。いわゆる、『旧約聖書』の「ダニエル書」から「死海写本」等におよぶ文書である。そこには、すでに「神の民の迫害」や「最後の審判」をはじめとする終末論的な主題の萌芽を見ることができよ

う。しかし、その命題となる「終末観」についてはどうだろうか。『新約聖書』の「黙示録」は、あくまでもイエスの歴史的な出現に負っている。また、予想された「神の国」は、ユダヤ教が説く「未来の約束」ではなく、すでに開始された「現在の救い」の告知である。いわゆる、新しい契約主であるイエスを中心とする信仰であり救済思想である。その具体相は、十字架に架けられたキリストの贖罪による救いであり、小羊なるキリストの再臨である。そこに、無限なる神が定める歴史の成就と完成がある。それは、新たな神の支配とキリスト論の結合と見ることでできよう。いまや両者ともに、「初めと終り」(アルファとオメガ)を包括し、全世界を支配することになる。その見事な「キリスト教化」の達成に、本書の思想的な特徴と獨創性があるといえよう。

ここに、私なりの「黙示録・試論」として、とくに本書冒頭の「序文」に注目しながら一断想を綴りたい。この黙示録世界では、いわゆる歴史上の「小アジア」が中心舞台となり、しかも重要な役割を演じている。まず、「著者」ヨハネ自身は、原始教会の指導者としてガリラヤから小アジアのエフェソスに移り、そこで没したともされる。その間、司教等の要職をへながら、諸教会での説教や伝道につとめ、数々の奇跡を行ったとの記述もある。また、本書の「成立場所」に関しては、一部に例の「パトモス説」や「エフェソス説」との相違があるものの、大筋として小アジアの西岸地方との見方でほぼ一致している。その執筆時期は、おそらくローマ帝国の迫害を目前にした一世紀末(九〇—一〇〇年)のことであろう。

さらに著者は、全能なる神イエス・キリストの「黙示」を証かす預言者として、とくに小アジアの「七つの教会」に書簡を送っている。申すまでもなく、この「七」という数字は、黙示文学の伝統をつく完全数であり、暗に「神的完全さ」を象徴している。ここで、その関連事項を本書(「ヨハネ黙示録」)の叙述に照らしてみよう。

まず、本書の第一章は、「イエス・キリストの黙示」を紐とく導入部として、「序文と挨拶」(一・一―三)をはじめ、「七つの教会への手紙の序文」(一・四―八)、「ヨハネの思召し」(一・九―二〇)等となる。つぎの第二・三章において、本題の「七つの教会への手紙」が登場する。いわゆる、天上のキリストが、預言者ヨハネを介して小アジアの教会に手紙を送る、との手法である。かつ、各々の教会で朗読されることを強く望んでいる。

ちなみに、その宛先となる「七つの教会」はつぎのようになる。一、「エフェソスの教会」(二・一―七)、二、「スミルナの教会」(二・八―一)、三、「ペルガモンの教会」(二・一―一七)、四、「ティヤテラの教会」(二・一八―二九)、五、「サルデスの教会」(三・一―六)、六、「フィラデルフィアの教会」(三・七―一三)、七、「ラオディケイアの教会」(三・一四―二二)である。いずれも、現実の諸教会が直面する病状と診断が簡明に記されている。

ここで、当時の「小アジア」情勢について一考したい。本来、この小アジア世界は、キリスト教の活気あふれる地域の一つであった。ヨハネの手紙に列挙される「七つの教会」は、いずれもこの地方での主要都市にあり、しかもキリスト教団の拠点でもあった。他面、小アジアの思想風土として、とくに「終末論的な昂揚」がみられる。じつは、「エルサレムの陥落」後も、まだ古き「ユダヤ・キリスト教」の伝統は残存し、また異端視される「グノーシス派」のメシア待望論も打ち消せなかった。さらに、ローマ帝国との身命を賭した対決が迫っている。事実、この小アジアでは、多種にわたる異教の祭儀が横行し、また多くの殉教者を出している。まさに、小アジアの「黙示的な危機」に挑む「手紙」の送信は必定であった、ともいえよう。

では、当時の諸教会をとりまく事情とは、どのようなものだろうか。その歴史的な様相について、一部の代表



(1) 「聖ヨハネ教会」の故地

(トルコ・エフェス、4世紀一同地に東ローマ帝国皇帝・ユスティニアヌス1世が建立した「聖ヨハネ-バシリカ聖堂」〈6世紀〉復元原型の一部)

事例から垣間見よう。まず、小アジア西海岸の古都「エフェソス」(現トルコ名セルチュック・エフェス)がある。小アジア最大の古代ギリシア都市であり、また著者ヨハネが最初に呼びかけた教会である。古来、小アジアの海港都市として繁栄し、ローマ時代には「アジア州」の首都として第一級の地位を占めている。他方、古くより大地母神を仰ぐ「アルテミス信仰」の中心地でもあった。古代ギリシア時代には、ギリシア神話の豊饒神にちなむ巨大な「アルテミスの大神殿」が建立された。その他、壮麗な野外劇場やセルシウス図書館をはじめ、現存する古代遺跡も多い。

なお、キリスト教時代の伝承では、ヨハネはこの地で福音書を著述して伝道につとめ、死後に埋葬されたという。かつて、同所には小さな教会(四世紀)が建てられ、その後「聖ヨハネ教会」(原型、六世紀)として形跡をのこしている。また、エフェソス遺跡の近郊には、聖母マリアが晩年を送ったとされる「聖母の家」(聖母マリア教会)も建っている。多分に、同地に先行した女神アルテミス信仰への托生であろう。さらに、聖パウロも「第三回伝道旅行」の途次に二年間滞在している。いわば、エフェソスは、小アジアにおけるキリスト教の中心地でもあった。ここに、あらためて「黙示録」の記述に照らせば、グノーシス派の浸潤やキリスト教徒の迫害に抗する「忍耐と労苦」を高く評価している。同時に、いまや初期の篤き信仰心をなくし「最初に愛を見捨てた教会」(二・四)との批判が込められている。

同じく、小アジア西海岸にある最古のギリシア都市「スミルナ」(現トルコ名イズミール)がある。かつては、一時エフェソスに征服されながらも、やがて小アジア有数の都市として発展し、ローマ時代にはエーゲ海最大の都市として名を馳せた。ちなみに、古代ギリシアの大詩人ホメロスの生地であり、彼は小アジアの中でも「もっ

とも美しい都市」として称賛している。他方、紀元前二世紀の末には、いち早く「ローマ女神」の神殿が建立されている。また、ローマ帝政期の初期には、小アジアの属州として最初の「皇帝祭儀」の拠点ともなった。「黙示録」に照らせば、「迫害に耐えた教会」(二・一〇)となろう。

さらに、小アジアの北西部にある古代ヘレニズム都市「ベルガモン」(現トルコ名ベルガマ)がある。小アジアの有力都市としてほぼ全域を支配し、とくにギリシア・ヘレニズム文化の一大中心地として栄華を誇った。また、ローマ時代の名高い遺産として、巨大な「デメテルの神殿」や「ゼウスの大祭壇」さらに「大図書館」等の建造物が偉観を呈する。他方、古くから小アジアで信奉された「ニコラス派」等の異教徒も定住し、その怪しい祭儀をやどす「サタンの王座」とも称された。いわゆる、ゼウス、アテナ、ディオニュソス、アスクレピオスの複合体である。また、ローマの属州として「皇帝礼拝」の主要舞台となり、その祭儀を司る公的中心地ともなった。「黙示録」に照らせば、「誤った教師の悔い改めを必要とする教会」(二・一六)となろう。

その他の教会群は、果たしてどうであろうか。小アジアの都市や諸教会においては、キリスト教徒にとって避けがたい「サタンの会堂」に属する人々も多い。さらに、皇帝祭儀への献身も強いられ、現に多くの殉教者を生んでいる。以下に、各教会への診断を「黙示録」に照らせば、つぎようになる。すなわち、「ティヤテラの教会」(「誤った預言者のいる教会」、二・二〇)、「サルデスの教会」(「眠りに落ちた教会」、三・二二)、「フィラデルフィアの教会」(「辛抱強く耐える教会」、三・一〇)、「ラオディケイアの教会」(「神にぬるく味気ない教会」、三・一六)となろう。総じて、本書「ヨハネの黙示録」が著される背景には、このように歴史的な混乱と試練に遭遇するキリスト教会の苦悶がある。その「手紙」の執筆意図は、まさに教会の指導者である「監督」(司教)を中心とす

る団結の要請であり、同時に古き「ユダヤ教的傾向」をもつ人びとへの闘争を呼びかけたものであろう。

さいごに、これまでの私的な「黙示録」の旅路から、その主要舞台となった小アジアの歴史的肖像と「宗教的遺産」について一断想を述べたい。ちなみに、この「小アジア」とは、アジア大陸の西端に位置し、広く黒海、エーゲ海、地中海に囲まれる地名である。現在のトルコ領の大部分を占めており、別名「アナトリア」(Anatolia)とも称される。その言葉の原義は、ギリシア語に由来し「太陽が昇るところ」を意味している。古来、人類最古の「農耕文化の発祥地」とされ、また「アジア世界」(中国西域文化、インド文化)と「地中海世界」(ヘレニズム文化)をつなぐ東西交易の要衝でもあった。他面、歴史上の豊かな知的および精神的な遺産を育む苗床ともなる。とくに、初期キリスト教の出自をはじめ、その美術や音楽さらに建築等にわたる影響も大きい。また、歴史上の一時期は、ローマ帝国の属州として重要な役割を演じている。ここでは、広義のシリアをふくむ「オリエントのキリスト教」について、その誕生の場景を省みたい。

今日、世上の常識として、周知のように「キリスト教はヨーロッパの宗教である」との通念がある。ここでは、新たにその「単純な誤解」を正す歴史的な検証を試みよう。まず、今日におよぶ「キリスト教」の発祥地は、かつて古名をカナンと呼び、「乳と蜜の流れる地」と謳われた「パレスティナ」(シリアーエジプトの中間地帯)である。その中央山地に、神が約束した「聖なる都」エルサレムもある。一先ず、当時の原風景を一望しよう。他ならぬイエス自身は、このパレスティナ北部ガリラヤ・ナザレの出身であり、洗礼者ヨハネの呼びかけに応じた「素性の知れないユダヤ人」の一人でもあった。ちなみに、これまで『旧約聖書』では、このナザレの町について言及されることもない。また、最古の福音書として、イエスの言行録を史上に初めて編纂した「マルコ福音

書」の成立地も、やはり同じガラリヤ近郊であった。さらに、名高い使徒パウロの異邦人伝道は、当時の中心都市アンティオキア（現トルコ名アンタキア）を拠点としている。他方、古代教会史を眺めれば、キリスト教の根本的な教義を定める「公会議」の舞台も、その大半がオリエント（アナトリア）であった。事実、第一回の「ニカイア公会議」（三二五年）の開催地は、現トルコのイズニクである。他面、今日一部シリアに残存するキリスト教（カトリック）の典礼用語は、イエス・キリスト時代の常用語であるアラブ系アラム語でもあった。

その他にも、古代オリエントの遺産が、広く後代の西欧キリスト教美術や音楽に与えた影響も無視できない。たとえば、現在シリア領に属する「ドウラ・エウロポス」の古壁画（「コノンの供儀」、六五―七五年頃）は、その東方的な美術様式の趣向において、西欧キリスト教美術の原型となる。また、同じくシリアの「カラト・セマーン修道院聖堂」（四七〇年頃）は、そのバシリカ様式に十字形プランを合せもつ建築として、初期キリスト教聖堂建築の範型となった。その他、かつてシリア北部を根城とした「アラム聖歌」は、ローマ・カトリック教会を代表する「グレゴリオ聖歌」（詩篇朗唱）の旋律に一条の光を授けている。もっとも、今日の「西欧巡礼論」に不可欠な「聖人崇拜」や「聖遺物崇拜」等の遺制も、他ならぬシリアからの聖なる「文明移転」と見ることができよう。

このように、キリスト教の歴史的な航跡は、何よりも「オリエントの遺産」に負っている、といえよう。あえて付言すれば、下界に漂う「ヨーロッパのキリスト教」という印象は、かつてカトリック教会の主導による一連の「教会合同運動」に起因するともいえよう。今日、その十字軍来の聖なる世界的使命と功罪が問われることになる。その意味で、新たに神学的な立場から唱導される「文化的受肉」（インカルチュレーション）という概念に

注日したい。いわゆる、キリスト教の自己批判と他文化との相互理解から、人類社会の総合的な把握を旨とするのであろう。その「開かれた信仰」の実践として、とくに故ヨハネ・パウロ二世（ローマ教皇）の他宗教に対する「讀罪の旅」は印象的である。また、現にキリスト教世界の最大課題とされる「東西教会の再統一」についても、ようやく対話の道が築かれようとしている。すなわち、千年来の分裂（二〇五四年）をこえる歴史的な初会谈（二〇一六年）として、キリル総主教（ロシア正教会）とフランシスコ教皇（ローマ・カトリック教会）による「聖なる和解」も緒についた、といえよう。他方、私的な一読書感ながら、著名なギリシア哲学者・加藤信朗氏の「アナトリア紀行」にも着目したい。その自己超越と深い省察に満ちた論考の表題は、いみじくも「アナトリアへの旅―ギリシア哲学・初代キリスト教・古代キリスト教成立の故地」と謳われている（『宗教と文化』二四、聖心女子大学キリスト教文化研究所刊、二〇〇六年）。まことに、キリスト教（カトリック）の「知の希望」を育む慧眼である。

総じて、西欧・キリスト教の「誕生問題」は、特定の「内なる思考」に留まることなく、広く他文明との交流をつつむ「外からの思考」も不可欠である。いわゆる、新たな比較文明学の地平として、とくに全体性の構図と関係性の認識に心をとめたい。いま、遥かに初期キリスト教の原郷を巡歴しながら、新たに「聖なるもの」の根源性と普遍性を見つめる「時の徴」は満ちている、といえよう。

今日、とくに人類文明史上の大きな断層として、新たに「変容の時代」を迎える。現に、二一世紀の「黙示録」として、身近に病める地球の暗雲がただよい、「世の終り」に対する恐れと不安も深い。一説に、広く宇宙的な視点から、「人類最後の世紀か？」（マーティン・ルイス）との警告もある。また、米科学誌の「終末時計」は、

すでに地球滅亡までの時間を「残り二分半」と告げている。果たして、人類は自らの手で「母なる大地」を殺すのだろうか。それとも、一縷の望みをかけて救うのだろうか。いま、あらためて人間存在の英知と回心の途について、自ら命名した「ホモ・サピエンス」(賢いヒト)という自負の真偽が問われることになろう。

かつて、ひそかに「現代の黙示録」を胸に秘めながら、かのオリエント紀行についたのは、トルコ(一九八二、八六年)、シリア(一九八六、二〇〇六年)から、アルメニア(二〇〇五年)および北アフリカ(一九八三、八四年)に向けてのことであった。その折々に、未踏の「東方・巡礼紀行」に同行した、いまは亡き木間瀬精三(西欧中世文化史)および森安達也(キリスト教史)両氏の、いとも寛大な人となりと見識を忘れることはできない。

二 「黙示録美術」の誕生と変容——サンティアゴ巡礼と「ロマネスク美術」

これまで、荘厳なる「ヨハネ黙示録」の開示は、新たな魅惑を秘めて時代の宗教感情を深めることになった。他面、一連の芸術的な創作活動に豊富な題材を提供し、新たなキリスト教美術の発展に寄与したといえよう。ところで、この黙示録が、キリスト教美術に影響を与えたのは中世前期である。いわゆる、宇宙的な靈感を秘めた黙示録の図像化と体系化の誕生である。その創作分野は、一連の写本装飾をはじめ、聖堂扉口の浮き彫りや内部壁画、さらにステンドグラスやタピスリー等の多岐にわたる。また、黙示録の図像形式を大別すれば、その壮大な「全体の場面」を表す多場面型と、特定の「個別の場面」を表す一場面型に分類することもできよう。その後、新装の「黙示録美術」は、広くスペインからヨーロッパ全土に流布され、西欧キリスト教美術史を彩る典拠とも

なった。

まず、「黙示録美術」の起源に眼をとめたい。いわゆる、キリスト教図像の誕生地は、一般にオリエントのエジプト、シリア、カッパドキア等に求められよう。ところで、今日語られる「黙示録美術」の中心舞台は、一〇世紀のスペイン・イベリア半島であった。代表的な写本挿絵として、北スペイン・リエバナの修道院長ベアトウスによる『ベアトウスの黙示録注解書』（「ベアト本」、七二六年）がある。とくに、黙示録の全体像を圖像化した写本美術の先例として名高い。その背景には、当時のイスラームによるスペイン・キリスト教徒の支配があった。暗に、わが身に降りかかる歴史的な試練と忍従は、まさに「黙示録」が著されたローマの迫害時代を偲ぶものがあった。他面、その後、数次にわたる対イスラーム抗戦としての「レコンキスタ」（国土回復運動、七一―一四九二年）が展開される。いわゆる、イベリア半島の奪回を目指し、かつスペイン・キリスト教徒の自負と西欧の威信を賭けるものがあった。その折、精神的なシンボルとなったのが、じつはスペインの守護の聖人として崇められた「聖ヤコブ」である。後世に、巨大な「西欧の心臓」とも謳われる大聖地「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」（スペイン西端、ガリシア地方）の誕生秘話でもある。

ここで、今日にみる歴史的な「ベアトウス写本」の一例を垣間見よう。まず、スペインでは、「ヘローナ写本」（ヘローナ市司教聖堂、九七五年）がある。絵師はエメテリウスで、多数の挿絵をおさめる大部の美しい写本である。また、「ファンクドウス写本」（マドリッド国立図書館所蔵、一〇四七年）は、レオン国王および王妃の依頼によるもので、絵師ファンクドウスによるもっとも壮麗な作例であろう。さらに「エスコリアル写本」（九五〇―五五年）は、絵師フロレンティウスによる最古の一例とされる。他方、「モーガン写本」（ニューヨークパイ

アポント・モーガン図書館所蔵、九六二年)は、絵師マギウスによるもので、その後「ベアトウス写本」の模範ともなった。

いずれも、上質の羊皮紙が用いられて保存状態もよい。さらに、色彩豊かで幻想に溢れる見事な芸術作品である。その印象は、もはや単なる説明的な挿絵というより、むしろ完全に「独立した絵画」の域にある。各々の写本には、絵師の署名、日付、製作場所等が記されている。その多くの成立年代は、おそらく「ヨハネ黙示録」(二〇章)の示唆による「紀元千年」ということになる。なお、主要な製作場所は、スペイン北部・レオン地方の「サン・ミゲール・デ・エスカラーダ修道院聖堂」(九一三年)である。とくに、東西をむすぶ優雅な装飾と完璧な融合で知られる。やがて、このスペインで誕生した写本挿絵は、さらに広くフランスに流布し、アルプス以北の「ロマネスク美術」や「ゴシック美術」の誕生に大きな影響をあたえた。西洋美術史上、その意義はきわめて大きいといえよう。

つぎに、あらためて「黙示録美術」の代表的な事例を訪ねよう。これまで、黙示録に関する特定の主題や場面を描いた名作も多い。まず、最初期の事例では、北イタリア・ラヴェンナの「サン・ヴィターレ聖堂」北側に隣接する「ガッラ・プラチデア霊廟」(モザイク、四四〇年頃)がある。その簡素な小堂の内部は、深い瑠璃色を基調とする見事なモザイクで覆われている。とくに、円蓋天井の中央には、天上界の星がとりまく「金の十字架」が首座をしめる、それを囲んで、使徒の「四福音書記者」像が讃えている。申すまでもなく、黙示録が重視する終末の刻とキリストの再臨を象徴している。他面、古代的な様式や手法をとどめながらも、東方ビザンティン円蓋装飾の初期事例としても重要である。私どもが、この「ガッラ・プラチデア霊廟」を訪れたのは、一連の「ヨ

「ローッパ中世巡礼」紀行の一環として、「ローマ巡礼」（スイス・イタリア、一九七九年）および「エトルリア美術とロンバルディア建築の景観」（イタリア、一九九〇年）に向かう旅路の途次であった。

さらに、その後の代表的な「黙示録美術」を訪ね、各分野別に概観しよう。第一に、黙示録の「絵画」を代表する事例として、フランス・ポアトゥー地方の「サン・サヴァン聖堂」（二世紀末）がある。とくに、身廊の天井全体を飾る半円アーチの壁画群をはじめ、全体に暖色系の淡い色調のフレスコ画で覆われている。その表現はいかにも自由自在にして伸びやかであり、一面フランス独自の調和にとむ感性をみる。一瞬、息をのむようなロマネスク美術の清らかな世界である。主として、「旧・新約聖書」をつなぐ一大「連作」として重要である。今日、フランス・ロマネスク絵画の「最大にして最高の傑作」ともされる。他面、「玄関口」の階上廊には、「ヨハネ黙示録」による「最後の審判」の劇的な場面が展開される。いわゆる、「栄光のキリスト」を中心にすえ、その周りを「いなごの禍」、「女と龍」、「龍を退治する天使」等の作例が飾る。いずれも、「黙示録」の幻想性と流動性に満ちた一大フレスコ画である。この「サン・サヴァン聖堂」を訪れたのは、「モンセラート巡礼」（フランス・スペイン）に向かう一九八〇年であった。

同じく、一連の黙示録「絵画」として、イタリア北部ロンバルディア地方の「サン・ピエトロ・アル・モンテ聖堂」（二世紀）にも注目したい。ひそかに、アルプスの山並みを望む山村チヴァーテにある。とくに、身廊（東アプシス）に広がる半円形の壁画として、黙示録による「最後の審判」が描かれている。いわゆる、有名な「黙示録の女および童と天使の戦い」（一一―一二世紀）の図像である。果たして、その左側に横たわる「女」は聖母マリアを、また足元の「男の子」は幼子キリストを比喩したのだろうか。いかにも、「黙示録」の強烈な色



(2)「黙示録」〈四人の騎手〉

(アルブレヒト・デューラー、木版、1498年)

彩と迫力を刻む個性的な作品である。ところで、この静寂な山麓に建つ聖堂は、八紀来の古きランゴバルト時代に遡及する。ふと、無上の天国へ通じる路として「天使の舞いおりるところ」（辻佐保子）との幻視に誘われる。他面、その豊かで色鮮やかなプレスコ画の描法に、先行のビザンティンおよびオットー朝絵画の余韻を偲ぶこともできよう。この「サン・ピエトロ・アルモンテ聖堂」を訪れたのは、「ランゴバルト・カロリング美術の景観」（イタリア、スイス、ドイツ、リヒテンシュタイン）に向かう一九九〇年であった。

第二に、黙示録の「タピスリー」を代表する事例として、現在フランス西部・アンジェ城内に蔵する「アンジェの黙示録」（一四世紀後半）がある。その下絵は、フランドル出身の画家ジャン・ド・ブリージュが、ある「黙示録」写本を参考にして仕上げたものである。元来、七枚のタピスリーに九〇場面（現在は七〇場面）を織り出した超大作である。各々に、大人物像（ヨハネ）が登場し、さらに「黙示録」の一四場面が展示される。フランスでは、現存最古にして最大の作例とされる。一印象として、赤と青を基調とする絢爛たるタピスリーは、やや装飾的で「宮廷美術」の感も深い。この「アンジェの黙示録」に対面したのは、「トゥールのサンマルタン巡礼」（ドイツ、フランス、スイス）に向かう一九九六年であった。

第三に、黙示録の「祭壇画」を代表する事例として、ベルギーの古都・ヘントにある「シント・バーフ大聖堂」がある。いわゆる、誉れ高い「ゲントの大祭壇画」（一四二五―三二年）である。ヨーロッパの絵画史上、後期ゴシックの優れた祭壇画として定評がある。その中心主題は、「ヨハネ黙示録」による「神秘の子羊の礼拝」（中央パネル・下段中央）となる。とくに、神の子羊とされるキリストの犠牲があがなう人間の贖罪と恩寵の象徴である。なお、その上段には、父なる神を中心に聖母および洗礼者ヨハネ等が構成する「最後の審判」がおか

れる。いずれも、初期フランドル絵画の創始者であるヴァン・エイク兄弟の合作とされる。いかにも、深い宗教性と象徴性を秘めた記念碑的な大作である。この「ゲントの祭壇画」に詣でたのは、「モン・サン・ミシエル巡礼」(ベルギー、フランス、エジプト)に向かう一九八七年であった。

第四に、黙示録の「木版画」を代表する事例をとして、アルブレヒト・デュラーの木版画集『黙示録』(一九〇八年、初版)も見おとせない。今日、木版芸術の至宝として不動の位置をしめる。ドイツでは、一五世紀後半になると黙示録も普及し、ケルンやニュルンベルクの「聖書」にも収められている。若き日のデュラーは、きつとこれらの作品から着想を得て、かの有名な木版画集を製作したのだろう。この全一五点からなる木版本は、とくに黙示録の全体像を克明に図示した最高傑作とされる。その精巧にして強烈な緊迫感をそえる版画集は、今日でも多くの読者を魅了する。このデュラーの木版画こそ、その後広く黙示録美術の範としてヨーロッパ全土に広がり、その名声を世界に広げたといえよう。かつて、デュラーの生地ニュルンベルクを訪れ、その偉才の作品群を鑑賞したのは、「ドイツ初期ロマネスクとバロック美術」(ドイツ、オランダ)に向かう一九九二年であった。

ところで、「黙示録美術」を語る重要な課題の一つとして、いわゆる「主題と変容」の問題がある。その新たな歴史的局面は、キリスト生誕後の「紀元千年」に見ることができよう。いわゆる、「ヨハネ黙示録」(二〇章)による「千年王国」の教説と「最後の審判」の顕現である。もはや、人類の世界史は終りを告げ、義人のみが許される黄金時代の到来となる。この深遠なる運命の開示は、あらためて八世紀末の「ベアトウス写本」への関心を深め、新たな写本やミニチュールを製作する機縁ともなった。しかも、ベアトウス写本の表現は、かつての激しい熱情的な表現から、より穏やかで優雅な表現に変貌している。いわゆる、イベリア半島におけるイスラー

ムとキリスト教の共存時代に見た、かの幻想的な「近東的な要素」の後退である。

黙示録美術は、この「主題の変容」という歴史的な新段階をへて、はじめてピレネー山脈をこえるフランス領内で受容される。その新しい宗教美術の震源地は、おそらくサンティアゴ巡礼の一拠点となるトゥールーズの「サン・セルナン聖堂」(スペイン、一〇八〇―一一一八年)であろう。いわゆる、西洋美術の独創性を染めた「ロマネスク美術」(二〇世紀末―二・三世紀)の誕生である。もつとも、その底流には、東方オリエントやイسلام美術の水脈が豊かに流れている、ともいえよう。事実、フランス・ロマネスク彫刻の最古とされる「サン・セルナン聖堂」のキリスト像(二一世紀)は、いかにも西域の仏像表現を偲ぶものがある。他方、もはや主題を彩る関心事は、終末論的な光景というより、現実的な「自己救済」の啓示であった。したがって、ベアトウス写本が宿す伝統的な主題も、きわめて限定されたものとなる。いわゆる、わずかに「王座のキリストと二人の長老」(「黙示録」、一一一―一六)と「最後の審判」(同、四―五)の図像である。

ちなみに、前者(「王座のキリスト」)の代表例として、フランス西部ラングドック地方・モアサックの「サン・ピエール聖堂」(二〇六三年献堂)がある。その中央扉口のタンパン(半円形壁画、一一〇〇年頃)は、やはり「世界の終末」に見るキリストの再臨をテーマとしている。なお、「四福音記者」の象徴となる四つの生き物と、二人の長老を伴う荘嚴なる「栄光のキリスト」像は、ロマネスク彫刻の「最高傑作」と目されている。また、この名高い「タンパン美術」は、やがて一連の「巡礼路様式」(キングスレー・ポーター)の精髓として、大聖地「サンティアゴ・デ・コンポステーラ聖堂」に向かう諸聖堂を飾ることになる。他方、後者(「最後の審判」)の代表例として、南フランスのオーヴェルニュ地方・コンクの「サン・フォア聖堂」(一〇四五―一六〇年)がある。山

奥の深い谷間にひそみながら、一二歳で殉教した聖女フォアの奇蹟と殉教で名高い。他面、その有名なタンパン（一二二〇年）を飾る「最後の審判」は、これまでの黙示録的な威圧性というより、むしろ福音的な優美性に富んでいる。

その後、伝統的な黙示録の主題は、南フランスから北上するにつれて希薄となる。現に、フランス中東部ブルゴーニュ地方・ヴェズレイに「サン・マドレーヌ聖堂」（一二二〇―五〇年）がある。小高い丘にそびえる美しく典雅な聖堂である。その表現力豊かなタンパンは、ブルゴーニュ芸術の傑作ともされる。ところで、その主題は、もはや「最後の審判」でなく、イエスが自分の復活と使徒の使命を明かす「聖霊降臨」である。このように、西欧に育まれた「黙示録美術」の原像は、とくに東方オリエント・イスラーム文明との折衝や歴史的な「千年紀」への推移とともに、大きな変容をとげることになる。

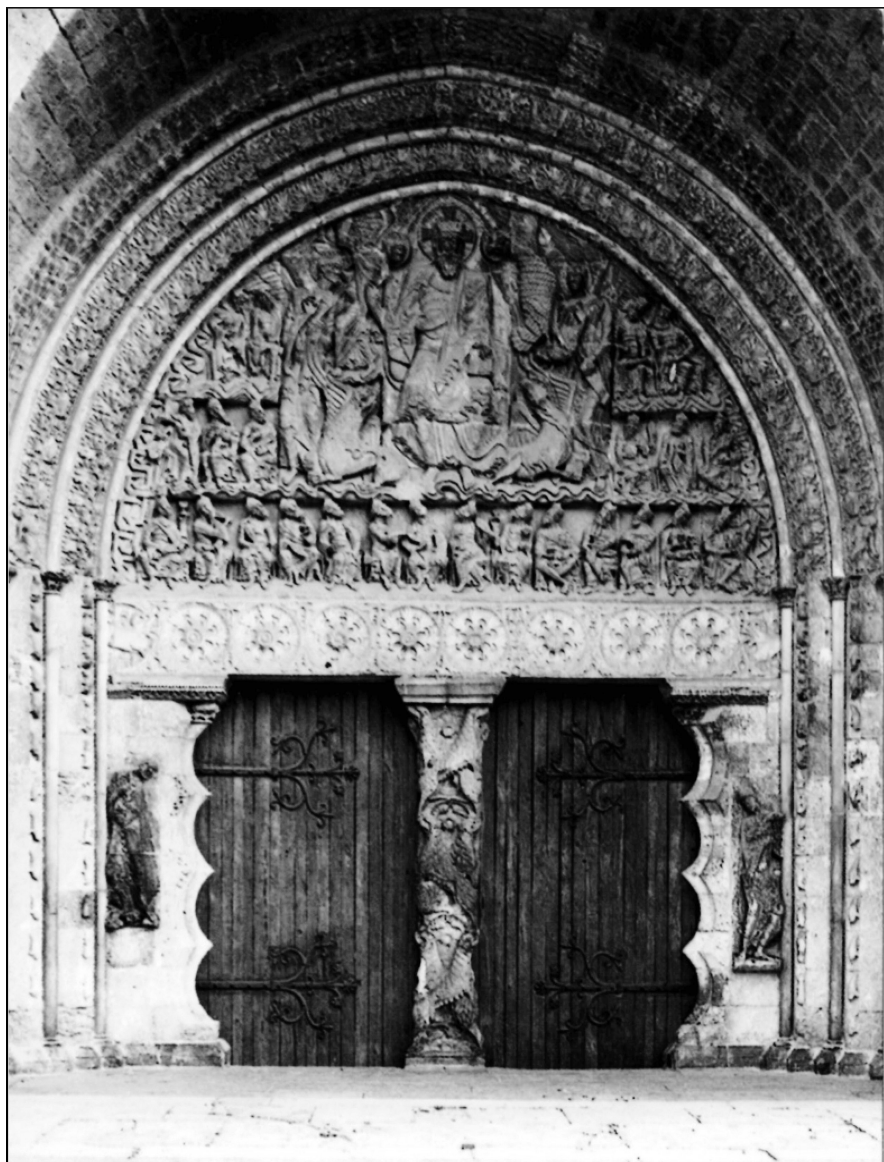
申すまでもなく、歴史上の美術様式は、諸文明を構成する基本的な要因である。その探究には、やはり美術史上に黙過されがちな「影響文明圏」の問題を無視できない。これまで素描した「黙示録美術」の誕生と変容の問題は、より広く「西欧文明」の歴史的な生成と変動を見ずえる重要な試金石ともなる。もとより、宗教美術の解説においても、これまでのように身近の表層に染まる「差異の目録」をこえ、その深層に響きあう「聖なるもの」の普遍性を読みとくことが重要である。総じて、偉大なる「象徴記号」の本質は、天空の太陽が一つとして輝くように、洋の東西をこえて同一であるといえよう。いわば、これまで多様な芸術様式の発展は「一つの道」を辿っており、相互の関係性と一貫性を見ることができよう。西欧文明が自ら誇る「ロマネスク美術」の源泉にも、とくに東方オリエント・イスラーム主導の「モサラベ美術」や「ベ아트ウス写本」の影響を無視できない。

他ならぬ、スペイン極西の大聖地「サンティアゴ・デ・コンポステーラ聖堂」への道行は、新たに西欧文明の定位と「黙示録美術」の再考を誘う「比較文明学の旅路」ともなった。その、中世巡礼の真実を求めた旅は、一連の「サンティアゴ巡礼―西欧中世巡礼紀行」（フランス・スペイン、一九七八年）および「サンティアゴ巡礼・再訪―黒い聖母の謎」（フランス・スペイン・ポルトガル、一九八八年）の折であった。

三 「黙示録」の幻想と靈感——モアサックのサン・ピエール聖堂（フランス）

南フランスの大都市トゥールーズから、北西のボルドーに向かう途上に「モアサック」という小さな町がある。遙かピレネー山脈に発するガロンヌ川に沿う、静かで肥沃な田園地帯の一角である。いかにも、フランスの農村風景をとどめる桃源郷でもある。今日、この町が有名なのは、古きクリュニー系修道院をつぐ「サン・ピエール聖堂」の豊穡な遺産に負う。とりわけ、聖堂正面を飾る荘嚴な「扉口彫刻」と美しい「回廊」を彩る柱頭裝飾に眼がとまる。いずれも、ロマネスク彫刻の「最高傑作」とされる。他面、中世にあっては、フランスの名高い聖地ル・ピュイから西北スペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼」に向かう重要な参詣地でもあった。中世の巡礼者たちは、各々に玄関口を見上げて「黙示録」の壮大な幻想にひたり、また隣接する「回廊」の清澄な息吹に英気を養いながら、ふたたび「苦難の旅」を続けたことであろう。

このサン・ピエール聖堂（一〇六三年献堂）は、史上に数奇な運命を辿りながらも、今日なお一群のモニュメンタルな「大彫刻」によって名高い。まず、聖堂扉口の「タンパン」（半円形壁面）は、「世界の終末」における



(3)「サン・ピエール聖堂」扉口のタンパン
(フランス・モアサック、1063年)

キリストの再臨をテーマとしている。その中央部には、神の威厳にみちた「栄光のキリスト」（マエスタス・ドミニ）が玉座をしめる。さらに周囲には、四福音書記者の動物象徴と二人の天使および二四人の長老たちが、神の御顔を仰ぎ見ながら埋め尽くしている。全体として、神の顔を光源とする「完璧な調和」を示している。申すまでもなく、時の終りを告ぐ「ヨハネ黙示録」（四章）の幻想と靈感を視覚化した宗教芸術である。

また、扉口の「中央柱」には預言者エレミアと聖パウロが、その「側壁」には預言者イザヤと聖ペトロが対峙して配置される。いわゆる、「新・旧約聖書」の教義に照らした象徴的な構図である。いずれの人像も、建築上の制約とはいえ、大きな歪曲を強いられて異様な姿態にも映る。しかし、むしろ当時特有の形体学として、神秘的な秩序を構成する洗練された技と見ることもできる。いわば、一種独特の「ロマネスク彫刻」の思想と造形美を宿しているといえよう。中でも、超絶的な神の姿は、一見日本の推古仏たとえば法隆寺金堂の「釈迦像」を彷彿させる。もとより、「黙示録」の原像は、支配者を神格化する東方的な伝統とも無縁ではない。他面、凜呼としたエレミア像は、高貴にして深い精神性に満ちており、見るものの心をとらえて離さない。

この聖堂の北側には、いかにも南仏の風光がそそぐ魅惑的な「回廊」（クロイスター）がある。修道士の聖なる生活にとって、外界から隔離された「静寂なる場所」こそ、心の安らぎに浴するオアシスであった。このサン・ピエール聖堂の回廊（一一〇〇年完成）は、ヨーロッパにおける「修道院回廊の白眉」ともされる。とりわけ、中庭の大きな西洋杉をとり囲む列柱廊は、バラ色の豊麗な柱頭彫刻と特異な円柱美が織りなす別天地である。いかにも、全体に流れる軽妙なりズム感と詩的幻想の戯れが心地よい。他面、柱頭彫刻の主題には、名高い「新・旧約聖書」の説話場面とともに、一見複雑怪奇な動・植物文様も登場する。多分に、『旧約』の「最後の審判」

を予知し、また『新約』の愛の賛歌に酔う躍動の輪舞であろうか。その初期ロマネスク美術の「偉大な作例」に、先行のビザンツ美術の影響や東方オリエントの甘美な香りを嗅ぐこともできよう。

ところで、この「黙示録」とは、『新約聖書』の最後を飾る預言の書で、使徒ヨハネが天使を通して与えられた「黙示」の記録である。その主題は、今や到来せんとする「世界の終末」のビジョンである。いかにも、氣宇壮大にして幻惑的な描写にみちている。その後、西方キリスト教美術の典拠ともなる。とくに、イスラーム支配下のスペインでは、謎の修道士ベアトウスによって『黙示録注解書』（ベアト本、七八六年）が刊行された。いわゆる、西欧世界で『黙示録』の全体像を画像化した最初の試みである。その後、ピレネー越えて南フランスにも流布しており、きつとモアサックの「大彫刻」に影響を与えたのだろう。これら「ベアト本」の淵源には、その様式のおよび裝飾的な観点から、ササン朝ペルシアやコプトをはじめ、シリア・アルメニア写本、さらにイスラーム的な要素を加味した「モサラベ美術」等の集積を見ることができよう。ここに、西欧キリスト教美術の源泉として、あらためて東方オリエントおよびイスラーム的な遺産に注目したい。

他方、ここでの「回廊」とは、一般に建物の全周ないし三方を囲む歩廊を意味する。この古くから愛好された建築様式は、古代エジプトの葬祭殿からギリシア・ローマの神殿をへて、イスラームのモスクや西欧中世の修道院へと伝達される。さらに、インド・東南アジア・中国などの多くの僧院も備えており、遙か日本の伽藍におよんでいる。このように、「回廊」の意匠は、世界史上の時と所をこえて連続とつながる。何よりも、「聖なる美」の普遍性を象徴しているといえよう。

遙かなるモアサックへの巡礼行は、人類史の命運を分かち「二一世紀の黙示録」として、新たな希望を奏でる

「美の回廊」への憧憬を深めるものであった。同時に、その知的予見として、A・トインビーの歴史的な洞察と希望のメッセージが蘇る。そのサン・ピエール聖堂を訪れたのは、初期ロマネスク美術の開花を求めて、フランスの「黙示録」壁画で有名なサン・サヴァン聖堂等をへて、スペインの「モンセラート巡礼」に出向いた一九八〇年の初秋であった。

四 「ベアトウス写本」と終末のビジョン——エル・エスコリアル修道院（スペイン）

スペイン・マドリードの西北西に、スペイン・ルネサンス建築を代表する「エル・エスコリアル修道院」（一五六七年）がある。ここに掲げる作例は、同修道院が所蔵する「雲の中の顕現と地上の人びと」と題された「ベアトウス写本」の挿絵である。西洋美術史上、特異な「モサラベ芸術」の一翼として名をなす「ベアトウス写本」は、八世紀に北スペインのアストウリアス地方・リエバナの修道院長ベアトウスが著したものである。いわゆる、「ヨハネ黙示録」（一世紀末）の註解書である。

その意図は、当時の東方異端説や異教イスラームの「不純な影響」を排し、キリスト教の威信を回復することであった。同書は、その後数多い華麗な挿絵も加わって広範に流布し、とくに西洋美術の誕生を告げる「ロマネスク美術」の誕生に大きな役割を果たした。一例をあげれば、まだ「黙示録」の幻想が漂う西南フランス・モアサックの「サン・ピエール聖堂」（扉口・側壁）の浮彫や、中部フランス・ロワール河畔の「サン・ブノア・シュル・ロワール聖堂」（柱頭）の彫刻は、その先駆的な遺産である。いずれも、「ロマネスク彫刻の代表作」の一つ



(4)「ベアトウス写本」〈雲の中の顕現と地上の人びと〉
(スペイン・エスコリアール修道院、10世紀)

として名高い。

元来、「新約聖書」の予言の書として物議を醸した「黙示録」は、使徒ヨハネが見た幻の記録とされる。とりわけ、「世界の終末」のビジョンを随所にちりばめている。主題の「最後の審判」の場面は、通常聖堂内部の西壁面や外部西入口上部の「タンパン」（半円形壁画）に描かれることが多い。いうまでもなく、西は太陽の没する方角であり、人類史の終焉を象徴する。

この「ベアトウス写本」は、「最後の審判」を題材として「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る」（ヨハネ黙示録一・七）という言葉をそのまま画像化したものである。すなわち、雲上の天使を従えて人間の形姿をとった神が、すべての地上の人びとを裁くために再来し、永遠の救いと罰を決定する。一見、仏教図像の「阿弥陀聖衆来迎図」のような仏画的な印象をあたえる。

ところで、「ベアトウス写本」が流行したのは、折しもヨーロッパの「千年紀」にあたる。時に、時代の大変動と恐怖が重なり、歴史的および心理的にも極度の緊張感が漂っている。事実、当時は異常な天候不順が続き、さらに外的脅威・異教の発生・疫病の流行等が交錯する。いわば、西欧文明の大きな曲がり角に見えた。それだけに、「最後の審判」を待ち望む声も強かった、といえよう。とくに、イベリア半島では、この黙示録こそ、異教のイスラーム占領地をキリスト教徒の手に奪回する、いわゆる「レコンキスタ」（国土回復運動）の精神的な支柱となった。

一方、「ベアトウス写本」を彩る挿絵は、どこか魔性を秘めた強烈な表出力にとみ、きわめて独創的である。その大胆にデフォルメされた力強いフォルムや鮮烈な原色主義の色彩構成は、一種の「記憶像」として見るもの

の心を呪縛する。その時をこえた深い印刻こそ、ゴヤからピカソ、ミロへと連なるスペイン近代絵画の源流ともなった。

他方、その豊穡な挿絵を育んだ文明史的な背景も見逃せない。いわゆる、一群の「写本絵画」の誕生には、その人物描写、様式のおよび装飾的な起源等において、シリア・アルメニア写本を始め、エジプト(コプト)、イスラーム、ビザンツ、ササン朝ペルシアにおよぶ「東方の遺産」が重要な一役を演じている。とくに、「最後の審判」の構図にみる「靈魂計測」の場面は、エジプト新王国時代の葬礼文書である「死者の書」を範にしている。その仲介的な役割を果たしたのが、おそらくエジプトの「コプト美術」であろう。また、四福音書の記者を象徴する「四つの生きもの」(テトラモルフ・人・牛・獅子・鷲)は、言うまでもなく古きシュメールおよびバビロニア美術に通底する、といえよう。ここでは、とくに諸文明の「芸術様式」における一連の交流と連鎖に注目したい。今日、西暦史上の「第三千年紀」を迎える中で、「病める地球」の症状も重い。あたかも「第二の黙示録」の危惧を深める折に、あらためて「ベアトウス写本」と対座する現代的な意味は深い。私が、このエル・エスコリアル修道院を訪ねたのは、イスラームの色彩を染めた「モサラベ美術」の道をたどり、かつ「グアダルーペ巡礼」に出向いた一九八三年と一九九七年のことであった。

五 「天地創造図」のタピスリーと宇宙観——ヘローナ大聖堂(スペイン)

スペイン東北部カタルーニャ地方に、ゴシック様式の大聖堂「ヘローナ大聖堂」(一四—一五世紀・改築)があ

る。ここに掲げる作例は、同聖堂博物館が所蔵する有名な「天地創造図」（中央部分図、一二世紀初頭）のタピスリー（つづれ織りの壁掛け）である。その雄大な絵画的な主題と、赤・緑・白などの彩りをそえた繊細で美しい色調に定評がある。申すまでもなく、本図は『旧約聖書』（創世記、一一二）の物語を下敷きにして、その「天地創造」の神話は、今日におよんでユダヤ教およびキリスト教的世界観の基軸となる。もとより、その源流として、古代オリエントのバビロニアやシリア等の文学的な伝統と遺産も無視できない。

まず、基本構図として、中央円形部分の主座を「エホバ神」がしめる。キリスト教的な解釈を施せば「栄光のキリスト」（マイエスタス・ドミニ）となる。その面影に、かつてのローマ皇帝画像の残影を見ることができよう。さらに周囲には、左右対称のアダムとエバの創生模様が登場する。その「乾ける土」に表される両者の表情は、いかにも人類誕生の秘話を明かすようで興味深い。あわせて、多様な鳥獣・爬虫類から魚類・植物・家畜等の誕生場面が、じつに生き生きと描かれている。そのほか、天空の「日月星」を暗示するような図像がほのかに浮かぶ。いわゆる、神の「天地創造」に関するキリスト教的な世界観の象徴図像である。これまで、キリスト教美術の一主題ともなっている。

古来、「世界の奥義」を垣間見たいとの欲求は、人間の誰しもがいだく本源的な願望であろう。これまで、壮大な「天地創造」の神話は、多くの民族によって語り継がれ、また優れた芸術作品も多い。西欧世界でも、たとえばヴェネツィアの「サン・マルコ大聖堂」円蓋モザイクの「天地創造」（一三世紀）やミケランジェロ作の「システイナ礼拝堂」天井画（ヴァティカン、一五二一―一五年）等は、その代表作である。他面、古代インドから現代におよぶ世界的な「宗教的図像」として、たとえばヘローナの一見「西洋曼荼羅」？と、本尊を中央におく諸



(5)「天地創造図」のタピスリー
(スペイン・ヘローナ大聖堂、12世紀初頭)

尊集絵の「日本曼茶羅」の比較考証も、新たな興趣を誘う。もとより、「まんだら」の本義は、万有相関の底流に「本質を得る」（観る）との意であろう。その最高の心理と悟りの心象が、ほかならぬ「まんだら」の図会である。

ちなみに、「タピスリー芸術」の歩みは、すでにエジプトを発端に古代ローマおよびコプト、ペルシア等で認められる。西欧世界への登場は、狭義にみて一一世紀であろう。その後、広く建築装飾として発展したのは一三世紀以降のことである。まさに、ヘローナの「天地創造図」のタピスリーは先駆的な位置にあり、現存する「古作織物」の記念碑的な作例となる。

私自身、いち早く、先史時代から芸術的な萌芽をみて、その後古代地中海世界の民族融合と文明交流の精華を育んだ「カタルーニャ美術」への思慕は深い。かつて、南フランスの「トゥルバドゥール」の原郷を巡りながら、次の「モンセラート巡礼」の途上にヘローナ大聖堂を訪ねたのは、一九八〇年のことであった。その折、中世初期美術の収集で名をなす聖堂内の小博物館で、世に写本芸術の粹として名高い『ベアトウスの黙示録註解書』（「ヘローナ写本」、一〇七五年）とともに、この貴重な「天地創造図」のタピスリーに対面したことになる。

六 イスラーム世界のキリスト教会堂——ダマスカスのウマイヤ・モスク（シリア）

古来シリアは、悠久の歴史を刻む「古くて新しい国」である。現代のシリアを語るとき、その豊かな歴史的遺産を黙過することはできない。ちなみに、古代地理上の「シリア」は、西アジアの「肥沃な三日月地帯」を始原

とし、その東部・メソポタミアと北アフリカ・エジプトを結ぶ「陸橋」であった。その範囲は、今日のシリア・アラブ共和国はもとより、さらに広くレバノン、イスラエル、ヨルダンおよびトルコ南部等を含んでいる。後年、この地を異教の住処とし、とくに「聖地パレスティナ」の名を分離したのは、ヨーロッパ・キリスト教の策謀であらうか。

総じて、シリアは早くから古代世界の中心として、人類史上に大きな貢献を果たしている。その「人類の恩人」とも言うべき業績は、いち早く著名なアラブ史家P・K・ヒッティの『シリアの歴史ーレバノンおよびパレスティナを含む』(一九五一年)等から読みとることができよう。他面、A・トインビーは、晩年の主著『歴史の研究』(二二・「再考察」、一九六一年)の中で、あらためてシリア文明の偉業を検証している。いわゆる、シリア文明と同時代のヘレニック文明との融合を「文化合成体」(cultural compost)と命名し、その運命的な出会いと新たな宗教的な啓示に注目している。

申すまでもなく、広義のシリア(大シリア)は、自ら世界的な「一神教の聖地」として、歴史上のもっとも重要な命題に立ち会っている。一先ず、初期キリスト教の原風景を描いてみよう。もとより、シリアはキリスト教の二大經典となる「新・旧約聖書」の主要な舞台となり、また新興のキリスト教を育む豊かな苗床ともなった。ちなみに、『旧約聖書』の伝承(「創世記」、九・一八―一九)では、大洪水後に生をえたノアの長子セムが、この「シリア」の地を興したことになる。いわば、人類史の源流を司る始祖の一人ともなる。他面、『新約聖書』の新たな福音と信仰は、ガリラヤ湖に近いナザレ出身のイエスを範にしている。また、そのイエスの言行や伝承を編集した「四福音書」(マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ伝)の執筆地は、主としてこのガリラヤ湖畔であった、とも

いえよう。

さらに、パレスティナの一地方に芽生えたキリスト教を、世界的な宗教に昇華した立役者が聖パウロ（紀元前後一六〇年頃）である。パウロは、小アジアのタルソス（トルコ）で生まれ、ダマスコ途上での靈感をえて後にキリスト教に改宗している。有名な「異邦人伝道」（伝道旅行）の拠点としたのは、当時ローマ帝国の重要な属州・シリアであり、しかも中心都市のアンティオキア（トルコ）である。じつは、このアンティオキアで、キリスト教の回心者から構成される「最初の共同体」が組織されている。また、初めて「キリスト教徒」という名称が用いられたのも、他ならぬこの地であった。その後、パウロは小アジア、ギリシア、イタリア等を往還しながら、多くの都市で説教を行い、また教会を設立している。この「聖パウロの道」こそ、やがて広大なローマ帝国の版図をつつむ「世界宗教」への布石になった。このように、歴史上のシリアは、他ならぬキリスト教の発祥地であり、その発生と拡大を見まもる中心舞台であったといえよう。あらためて、キリスト教は「オリエントの宗教」である、との感慨に誘われる。

他方、初期キリスト教美術の展開において、シリアが果たした役割も大きい。当時、ローマ帝政後期にみる「地中海」の重心は、すでに東方（シリア、パレスティナ、メソポタミア）に移行している。いわば、その歴史的な過渡期がかもす文化遺産として、美術史上の「古代ローマ・ギリシアの様式」（写実主義）と「アジア・東方的様式」（抽象主義）が融合する独自の「キリスト教芸術」が誕生する。その中でも、とくに「シリア芸術」の貢献は特筆されるものがある。もとより、その総体的な神感や宗教的な心情は、遙かにペルシア思想やインド思想を淵源とする、ともいえよう。

ここで、その代表的な諸事例に注目したい。第一に、一連の「シリア写本」(五―六世紀)に描かれる「キリスト教図像」(挿絵)の編纂がある。その絵画様式や人体像には、先行の古代西アジア(アッシリア、ペルシア)芸術を偲ぶこともできよう。第二に、「シリア絵画」の代表作として、ユーフラテス川に臨む「ドュラ・エウロポス」遺跡(バアル神殿)で出土した最古の壁画「コノンの供儀」(六五―七五年)がある。その東方美術を秘めた華麗なる投影を、西欧・初期キリスト教美術の中心地・ラヴェンナの「サン・ヴィターレ聖堂」(モザイク、六世紀中葉)に見ることができよう。また、小アジア内陸の秘境にひそむ「カッパドキア」(洞窟修道院聖堂、七―一〇世紀初頭)の諸壁画がある。とくに後期の作例は、いかにも自由奔放な形態と色彩にとみ、西欧の青春を告げる「ロマネスク美術」の前兆を彷彿させる。

第三に、シリア各地に建立された一連の「シリア聖堂建築」がある。その先駆的な遺構として、名高い「黄金八角会堂」(ドムス・アウレア、アンティオキア、三四一年)がある。かつては、広壮にして豪華な佇まいを誇ったものの、その後火災(五二六年)に遭って消失する。いまや、往時の誉れ高い「黄金のドーム」の偉容を見ることはできない。しかし、その集中会堂にドームをのせた「八角形式」は、後代西欧にみる教会建築の基本型ともなる。先の「サン・ヴィターレ聖堂」(イタリア)や「アーヘン大聖堂」(ドイツ、八〇五年)等は、その典型例となろう。ちなみに、この「ドーム」(円蓋)という構想は、本来「聖なる天」を象徴するシリア的な伝統でもある。さらに、シリア特有の「柱上修行士」像として、聖シメオンを記念した「カラト・セマーン修道院聖堂」(シリア、四七〇年頃)も見逃せない。その壮大な建築様式は、かねて念願とされた円形の「集中方式」と長堂の「バシリカ方式」を融和・総合したものである。また、その理想像は、東方の後期ビザンティン聖堂をはじめ、西欧

中世の聖堂建築を誘導する大きな指針ともなった。このように、歴史上のシリアは、後代の多彩な「キリスト教芸術」を育む揺籃の地でもあった。いわば、シリアを中軸とする「東方芸術」の遺産は、後続の「イスラーム文明」に継承されるとともに、とくに西欧キリスト教文化の「源泉となり、大きな影響を与えたといえよう。ここに、これまで地上に開花する「聖なる美」の普遍性を照らす曙光をみる。

つぎに、新たな歴史的な観点をそえてみよう。いわゆる、「西欧文明」の誕生問題とシリア文明の先駆的な役割について一考したい。もとよりシリアは、古代世界を結ぶ「東西文明の十字路」として、古代フェニキア以来の商業活動で知られる。とくに、シリア商人の活動は、すでに四世紀末のイタリア貿易を皮切りに、五世紀末にはガリア（フランス）におよんでいる。当時、ガリアの輸入品目には、たんに経済的な物資だけでなく、宗教的な財宝も多い。たとえばこのガリアの地に、近東の「聖人崇敬」や「聖遺物崇拜」等の種子が播かれることになる。また、東方出自の「聖ゲオルギウス」（イングランドの守護聖人）や「聖クリストフォロス」（巡礼者の守護聖人）、さらに「聖ニコラウス」（サンタクロースの原像）といった名だたる聖人像が伝来する。これらシリアからの「聖なる文明移転」は、広く西欧中世の民衆信仰を導く礎となった。このように、西欧文明の誕生にとって、シリア文明の仲介的役割と遺産は、殊のほか大きいといえよう。概して、西欧文明の誕生問題を省みるとき、いわゆる古代地中海世界の転換をめぐる外的規定として、かの「ピレンヌ・テーゼ」に先行するシリア文明の役割を無視できない。

ここに掲載する「ウマイヤ・モスク」（シリア）は、世界最古の都市・ダマスカスを代表する記念碑的な建造物である。その「聖なる場所」は、遠く紀元前一二世紀に都をおいたアラム人の「ハダテ神殿」に由来する。そ



(6) 「ウマイヤ・モスク」
(シリア・ダマスカス、715年頃)

の後、ローマ領時代には豪華な「ゼウス神殿」（一世紀）が建立される。さらに、洗礼者ヨハネに捧げられた壮大な「聖ヨハネ聖堂」（四世紀）へと変貌する。その初代キリスト教の一大聖堂を改造し、新しい「大モスク」（七一五年）を完成したのは、ウマイヤ朝の第六代カリフ・ワーリド一世であった。

今日、イスラーム世界の最古にして最大の偉観を誇り、また多くの巡礼者が集う「第四の聖地」としても名高い。他面、「初期イスラーム建築」を飾る結晶として、エルサレムの「岩のドーム」と並び称される。とくに内部装飾は、全壁面を極彩色の壮麗なモザイクが覆い、幽境にして深遠な美をかもしている。もともと、このウマイヤ・モスクは、古くはエジプト・メソポタミア文化の伝統を継ぎ、さらにローマ・ビザンティン建築を範としている。しかし、ウマイヤ朝の豊かな包容性も結実し、その後「イスラーム美術」の傑作として聖堂建築の模範ともなった。

至高のイスラーム経典『クルアーン』は、旅人を砂漠のオアシスに誘う「楽園」としてダマスカスを描いている。ふと、ありし日のダマスカスを偲びながら、とくに初期キリスト教の誕生とイスラーム美術の精華を求めてシリアを周遊したのは、まだ戦火の呪いを見ない一九八六年と二〇〇六の春であった。